

Bangladesh の初級日本語学習者と 日本の高校生との COIL 型教育プログラムの開発

Development of a COIL-type Program between Bangladeshi beginner-level Japanese language learners and Japanese high school students

鵜澤威夫*** 中野 裕司** 合田美子**
Takeo Uzawa* Hiroshi Nakano** Yoshiko Goda**

*宮崎大学 **熊本大学
*Miyazaki University
**Kumamoto University

<あらまし> 本研究においては、 Bangladesh の初級日本語学習者と日本の高校生間における COIL 型教育プログラムを開発、実践することを目的とする。ICT を活用して、 Bangladesh 人の英語が堪能な ICT エンジニアかつ初級日本語学習者と日本の高校生が、日本語と英語で会話し、双方間で学びあえる協働学習を行うことで、それぞれの課題である、日本語教育のアウトプット、異文化理解等スキル習得を達成することができた。

<キーワード> COIL 型教育、初級日本語学習者、高校生

1. はじめに

新型コロナウイルス感染拡大の中でオンライン教育の需要が拡大し、2010年代の後半より日本国内でも導入が進められてきた、地理的に離れた人々がオンラインでつながり、協働し、学び合うことを目的とした教育手法である「COIL 型教育」が注目されている。この手法を用いることで、学習者は言語コミュニケーションの向上のみならず、他国の状況への理解にも繋がると先行研究から明らかにされている(村田・ミー2022)。文部科学省も COIL 型教育を日本と海外の大学間での導入を段階的に進めており、今後は大学教育以外の場でも導入が進められると考えられる。そこで、本研究においては、ICT エンジニアかつ初級日本語学習者である Bangladesh 人と、ICT 初心者かつ異文化交流の機会が少ない日本の高校生間での、COIL 型教育を開発、実践し、その課題と解決策を検討し、今後のカリキュラム改善へ繋げることを目的とする。

2. 研究背景と課題へのアプローチ

2.1. 海外在住日本語学習者の課題

筆者はこれまでに海外 4 か国の高等教育機関で日本語教師として活動してきたが、多くの日本語学習者が、教室外で日本語と接触のない学習環境に置かれていることに課題を感じた。新型コロナウイルス拡大におけるパンデミック以降オンライン教育が日本語学習の現場においても普及してきているが、海外に暮らす日本語学習者の多くは

未だ日本人とのオフライン/オンライン双方の交流の手段や機会を模索している段階であり、実践的な日本語使用や異文化理解の機会が少ない状況には変わりないと言える。

2.2. 日本の高等学校の課題

日本の高等学校においては、国際理解教育の実践が 2000 年代から行われてきており、グローバル化が進む今、海外と接点を持つ日本人だけでなく、日本の外国人在住者の増加から、国際理解教育の需要は高まることが予想される。国際理解教育の現状としては、1 対生徒の講演型の教育が多く、海外の人との少人数の双方向型のコミュニケーション教育を展開できている教育機関は少ないと推測できる。

3. COIL 型教育の実践

以上にあげたように、海外在住日本語学習者と日本の中等教育の生徒にはそれぞれの課題がある中で、筆者は現在、宮崎大学履修証明プログラム「外国人 ICT 技術者人材育成プログラム (B-JET)」で日本語教師として国際・地域連携の人材育成事業に取り組みながらこれらの課題解決を試みている(宮崎大学・JICA 九州 2023)。この中で、B-JET CAFE を運営し、海外在住 Bangladesh 人 ICT エンジニアかつ初級日本語学習者(以下 B-JET 生)と、宮崎県内の公立高等学校(以下 T 高校)の生徒間で

COIL 型教育を実施している。全7回のカリキュラムで構成されており、授業時間はそれぞれ50分間、B-JET 生は約30人、T 高校生は1,2年生約18人が参加している。4回目から小グループに分かれ、最終課題として、小グループごとに、両国や町を紹介する動画を ZOOM 上で作成している。カリキュラム概要は以下の表1の通りである。

表1 カリキュラム概要

授業	トピック/活動
1	アイスブレイク：自己紹介
2	トピックトーク：趣味・食べ物等
3	トピックトーク：出身国・文化紹介
4	ビデオ作成①：テーマ決め
5	ビデオ作成②：構成・台本決め
6	ビデオ作成③：リハーサル
7	発表会：発表の様子を撮影

4. 実践結果と課題分析

4-1. 結果

2度のT高校とのB-JET CAFE 実践結果としては、アンケートからは、双方に満足度が高く、一定の成果がある事が明らかになった。また、具体的に獲得できる知識やスキルとしては、全体共通して異文化理解が高く、日本側はICTスキル、バングラデシュ側は日本語能力向上が顕著に見られた。

4-2. 現在のカリキュラムの課題と解決策

さらに、現行カリキュラムの学習者と運営側の課題と解決策を検討し、表2、3にまとめた。

表2 現行カリキュラム学習者の課題

学習者の課題	解決策	B	日
ZOOM や Google ドライブなどの ICT の活用が難しい	ICT を使ったコミュニケーションへの事前学習の実施	-	○
初級日本語学習者とのコミュニケーションが難しい	やさしい日本語の事前学習の実施	-	○
学生が教員の指示がないと協働学習が進んでいない事がある	教員の指示・サポートが少なくても自分たちで学習できるツール作成	○	○
前回のリフレクションで得た学びが次の活動に活かされていない	自己調整学習に基づいたリフレクションツールの作成	○	○

表3 現行カリキュラムの運営者側の課題

運営者の課題	解決策	B	日
異文化理解力の評価はアンケートのみで指標がない	異文化感受性発達尺度を参考にし、ルーブリック評価を実施	○	○
小グループに分かれた際に、グループによっては、コミュニケーションへの積極的な差異がある	グループワークの際の手助けツールの作成や、ファシリテーション役の教員がヒントを出すシステムを構築	○	○
運営に必要な人数が多く、教員の負担が大きい	オンライン上の教材やサポートツールの作成	○	○

以上で挙げたように、双方の課題を解決し、B-JET と T 高校間のスムーズで質の高い COIL 型教育を実現していきたい。

5. 今後の課題

さらに今後は、T 高校生や B-JET 生以外にもこの取り組みができるように進めていくことを目標としたい。その為、これまで実践してきた B-JET CAFE を T 高校以外の高校、さらに中学校においても実践ができるように、上記でおこなった現カリキュラムの分析から明らかになった課題と、その解決策に対するアプローチを実践レベルに落とし込みたい。実践においては、初級日本語学習者であるバングラデシュ人と、ICT 初心者かつ異文化交流の機会の少ない日本の中等教育機関の生徒を同様に対象とし、それぞれが学習目標を達成する事ができ、学習者・運営側双方にとって導入へのストレスの少ない方法で、より学習成果を達成することのできる、COIL 型教育プログラムとその教材開発を目指したい。

参考文献

- 宮崎大学・JICA 九州（2023）B-JET について紹介パンフレット、
<https://www.miyazaki-u.ac.jp/kokusai/mediafile/75a38a2d1a1a7b3202664c511381b4d3f585c24b.pdf>
- 村田晶子・ダオ・ティ・ガー・ミー（2022）
 複言語・マルチモーダルなリソースを用いた「第三の空間」での協働。村田晶子編、オンライン国際交流と協働学習：多文化共生のために、p.83-100、くろしお出版